

貸した家

水野 仙子

お米は十八になった。表町の暖簾を疊んで赤味の目にたつ柱などの、まだ障ると濕つぽさうな、木の香の充ちた家に住んでから、もう三年経つたのである。こんなことをつく／＼思つた。そんなことを考へたのが不思議にも思はれた。が逃げかけて居た或る考へがふと戻つてくると、急に胸が塞がつてつひ茫然となる。闇は縁側に足をぶらさげたお米の浴衣を白くした。臺所にはコチ／＼と皿の音がする。人氣を慕ふ蚊が時々かぼそく泣いては何處にか潜んで了ふ。

それから三日過ぎてお米に婿が來た。毛ほどもそんな考のなかつたところへ、それも其三日前、突然お米は婿を迎へるべく命ぜられた。驚くことも出来なかつた。たゞ呆然して暮した四日目の夕、髪結ひが來て、流行真似の束髪を島田にして、大きな五つ紋の付いた、母親の空色の小袖を着せられた。十九になると年が悪くい、婿取りは嫁入りと違つて、仕度などは後でいくらでも出来る、かういふ老母の言葉に従つて、俗に足入れといふ、假祝言をすましてしまつた。

脊の高い人であつた。同じ町の或る質屋に婿となつて、其家の娘がお産で死んでしまつたあと、直ぐ

に妹をといはれたのを、厭だといつて出て來た人である。當人こそ見たことがなかつたけれども、其話も聞いて知つて居たし、其娘といふのは、脊の小つちやい、一寸小綺麗な人であつたこともお米は知つて居た。けれども其様な人等は、自分と何の關係もない、時代の違ふ人のやうに思つて居た。縁といふは不思議なもの、それが突然お米の婿となつて來たのである。

その夜はかたばかりの祝宴が開かれて、細い脇の通りの木槿垣から、小座敷の赤い灯の影が、ことあるらしく道行く人の目についた。夜中にふと目を覺ましたお米は、この家に移つた當時、生木を使つた戸や柱の罅裂る音が、こんな時は殊に氣味の惡ろかつたことなどを思ひ出して、その頃が懐しいやうな、淡い侘びしさを味はつた。そして自分はもうめつきり大人になつたやうな氣がした。

婿はよく働いた。一體が手忠實な人で、大抵のこととはなんでも出來た。これといつて別段用のない家のこと故、反物の包み紙で寫眞帖をこしらへたり、紙の喰み出た小説本を綴直したりした。また薪割りや畑仕事……といつても、種蒔きや草筆り位のものであるが、そんな力業を喜んでやつた。おやつにはいつも鹽のついた握飯に、色のいゝ澤庵が、岡持ちに入れて畑に運ばれた。畑はあちこちのを集めて一

町歩^{ちやうぶ}ほどある。蔓を手繰つて、茶色になつた莢^{さや}を揉んで、干して砂糖の袋に入れて、冬まで吊して置くほど、莢^{さや}豌豆^{えんどう}も作れば、菜は勿論大根でも芋でも、その折々の作物は、假令^{たとひ}少しづつでもなんでも作つた。舅の儀助^{ぎすけ}は用がないから、つひ畑のことなどばかり考へて居る。また自分からよく手を下^{おろ}してやつた。良三郎——婿の名——も、夕暮の一寸の隙を、香りの烈しい葦^{いり}の刈りあとに灰を撒いたり、筒袖を裏反しに着て、赤い新馬鈴薯を掘りになどにも行つた。萬事さういふ風であつたから、近所の人に褒められるまでもなく、やかましやの祖母がまづ第一氣に入つた。これこそ一旦潰れた暖簾を起してくるに違ひない、と思ふと、それが自分の功^{てから}でもあるやうな氣がして、どんなに足の痛む時でも、良三郎が坐る前ではいつも濫い笑顔をつくつた。

吉野屋の暖簾は潰れたのではなく、潰したのであつた。あまり聞こえた店ではなかつたけれども、間口は可なり廣し、兎も角も其所^{そこ}邊^ちは町の本場だったので、裏町に持った畑の中に、鑿の音がして鉋屑が飛ぶ頃から、儀助の心を計りかねた説がさま／＼に傳へられた。まづ第一番に、相場の好きさ、よく夕方は屋根の上にのぼつて明日の天氣を見る、角の荒物店の主人、のそり／＼と向ふ側へ景況を見に出掛けては、「どうでござすえ」と羽織の裾をまくつて、

やがて腰から煙管をぬいて、眞つ白にほけた火を掻き散らし乍ら、「いやどうも／＼」が癖の不景氣話、これが一番に口では吉野屋の暖簾を惜しんだ。

惜しまれるのも知つて居る。惜しいとも思つて見る。けれども人に忠告され／＼ばされるほど、例によつて「なアに……」と粘つたやうな一言を笑顔にして、儀助はその度に益々我決心が堅くなつて来るやうな氣がした。無口な代り、言ひ出したら最後、逆へば益々固くなるのを知つて居る老母は、終ひには諦めて一言もそれには口を入れなかつた。

儀助は人の好い、笑顔の絶えない、洒落者の父と、何から何まで行き届く代り、小言もまた随分皮肉な、母との間の一人子である。親父は祝儀ものや何かの疊みものなどが好きで、よく三寶の穴のむけ方だの、三々九度の盃の初め方などを、聞きに來られて喜んで居た。羽二重の禪を締めて見たけれども、つるつるして駄目なものであつた、といふことが人を笑はせる自慢話の一つであつた。其親父が腎臟で死ぬ。儀助は家督になつた。その時はお里といふ嫁を迎へてから、三年ばかり經つて居たのだが、まだ子供がなかつた。お里は目の鋭い、鼻の隆^{たか}くて尖つた、其一家の血統^{ちすち}をひいて居る。ふら／＼として離縁^{さち}れるのを氣遣ふことばかり口走るやうになつた。一寸した風呂敷包みを見ても、直ぐに實家に送りかへされ

るものと思つて、泣いて騒いだ。その頃から吉野屋の一家は擧つて成田山の信者となつた。儀助は凍る月の夜の井戸端に、水を浴びたことも度々あつた。ところが思ひがけなくお米が生れたのである。お里もおひおひ落ちついて、今でも成田山には鮭を斷つて居る。

お米が育つまでは、それに引きずられた形で店の處理をして來た。夏物冬物の仕入や——呉服屋であつたから——に、年々二度の上京、それもお米に、人形なり毛糸なりを買つて來るのゝ方が、重な用であるやうな氣がしてたかも知れない。お米はだん／＼いゝ子になつてくるし、其周圍の穩かさは、儀助が分別を働かせる必要もなかつた嫌ひと名付けすることは出來なくても、第一商賣に必要な競争心が薄い。年々店卸しの結果が、あまり思つた程でないのを見ると、其度にこんな煩はしいことをやつて居なくてもといふ氣が起る。兎も角も四間半の店を張つて居ては、やれ何税彼税と煩さく窘めつけられ、祭典の時の屋臺の經費すら、家相當に負擔ねばならぬ。それよりもまづ上の倉をつけて、屋賃の上り高が年に幾何々々、地所地面の上り高がこれ／＼と、大ざつぱに積つて見ても、親子三人に老母一人の四人なら大丈夫喰つて行ける。或る日こんなことを考へたのが、月が經ち、年を越したにつれて、つひ斷

行するまでの運びになつた。萬事を切つて廻して居た番頭の忠助が、同じ町の足袋店に入婿となつたのも決心の原因の一つであつた。夏來れば夏で團扇の意匠の選擇も面倒臭いし、慾がないではないが、さればといつて大儲けしやうなどゝの野心もなく……自分には出來ないことゝ思つて居る儀助は、今まで大した失敗もなく成功もなく、波瀾のない天地に欠伸をしたのである。

店は小僧どもごとそつくり譲り受けて、家宅に上の倉をつけて借りやうとする人があつた。町の人に存在もわからぬ程、小つぽけな家に小間物店をひろげて居た人で、至つて腰のひくい、早い、一寸こゝら近邊の言葉ではなかつた。馬鹿に色が白くて、大柄な内儀さんは、またなか／＼の愛嬌もので、體に似合ず聲が優しかつた。其噂さがひろがると、あの先生あれでなか／＼の預金があるさうだ、などゝいふやうなことが、何處からともなく人々の口に傳へられた。

畑の中の家が出來あがるのを待たず、佛壇のある薄暗い八疊に、長火鉢を一つ置いて、親子と老母の四人は其室に籠つた。

紺の色新らしく染められた暖簾は、筆法勢よく加賀屋と讀まれた。棚の向きを替へて、目覺めるや

うなメレンスをかけるやら、帳場の位置を直すやら、新しい主人は、朝に晩に、楊子を使ひながら、下駄をつゝかけて、あゝでもない、かうでもない、店のふりを見て置いては直した。間もなく大仕掛けの賣り出しがはじめられた。家の前には緑門アーチがたつて、それには山に丸の印を書いた赤い小旗が無數にさゝれた。二本の旗竿には、赤と紫とが、白くぬいた大賣出しの太い字を繕よつて流れた。鬼灯ほうづきぢやうちん提燈を二列に渡して、向ひの唐物店たうぶつやの二階の格子に結ゆはひつけて、夜るはそれに灯を入れた。景品にはボン／＼、時計がある、反物がある。正宗の壇などもぞろりと並べられた。夏のことであつたから、涼みがてらに白地の人などが、子供の手をひいて緑門アーチをくゞつた。それが三週間ばかり續いた。けば／＼しい装飾かざりたてはとられたけれども、何處となく古着店がゝつて居た吉野屋の面影はなく、生々とした店になつた、と向ひ合つた家々では噂さした。小僧の顔も二人ばかり新らしくなつた。

八疊の間には四人が爲すこともなく日を送つた。儀助は一日畑につめて、手を後に組んで大工どもの仕事を居る。夕方になると、炭俵に匏屑や木つ端を詰めて、一々それを納屋に入れた。夜になると煙草入れを持つて、ふらりと店に出かけて見る。すると新主人はいつも、二言三言のお愛想をいつて、

後はさも氣忙きぜはしさうに、帳場にかへつてパチ／＼はじめる。こんな時に陰の八疊では、暗い洋燈ランペンの下に、足の痛さをさすりながらも、屑綿をほかすとか、糸を繼つなぐとか、何かしら手を動かして居る老母が、定きまつて心で「ふん！」といった。自分で考へて見て可笑しくなる程、譯なしに加賀屋の夫婦のやることが氣に喰はなかつた。澤山の蜻蛉が押し寄せて來て、ぶん／＼、唸りながら神棚おたなの中にはいり込んで、秉燭ひやうそくの油をむらがつて吸つて居る。それをほこりばかりで追ひたてようとすると、蜻蛉は一足も残らず自分の襟もとに吸ひついて放れない。聲をたてようとしても聲が出ず、跳もがいて／＼居るところへ、大きな黒い塊りが後ろから轉げて來て、どんとぶつゝかつて、自分はごろ／＼と眞つ暗な穴の中に落ちてしまつた。いつかのこんな夢を思ひ出して、其黒い塊りはあの夫婦の心に違ひない、などゝこんなことをさへ思ふ時があつた。五つになる加賀屋の子が、或る時ちよこ／＼とやつて來て、指をなめて障子に穴をあけて、中を覗いて見たといつて、眞まつ向きになつて怒つたこともある。

成田山の御利益ごりやくで子供が授かり、自分の病氣も癒つたと思つて居るお里は、常には人を疑ふなどゝいふ毒氣どくけは少しもなかつた。其毒氣のないのが、幾分か精神に異常のある徴しるしであつた。時とすると、自分

一人を寄つて群つて打擲つたり叩いたり、子まである仲を裂いて、此家を追ひ出さうとする、密議の有様などを、まぎ／＼と幻影に見て、興奮しきつた顔を眞つ赤にして、泣き聲をたてながら一人言を云つて居る時がある。こんな時には荒々しく、却ていろいろな仕事をした。それでも物賣りが來たり、人に言葉をかけられたりすると、さもない風で満足な應對をして居た。家内のものは、馴れて居るから、もう其時は黙つて放擲つて置く。するうちに自づと落ちついて、けろりとした風で、襷をはづして袈裟がけにして、戸棚から丸いお膳を出して、カチ／＼箸の音をたてながら、内輪にお晝を喰べにかゝる。若いうちから白髪が多かつた人で、その頃はよく染めて居た。

「おや／＼まア綺麗に飾られて……おつ母さん出てごらんなさんしよ、なんてまア綺麗に……へへへ」とんでもない時にえへへへとさも可笑しさうに笑ひ出すのが癖で、初対面の人は、これに驚かされてよく顔を見たものだ、自分ではそれを意識してないのかも知れない。——仕切りの障子を開けて、とほんとした顔を出して店を眺めて居る時などがある。すると老母はまた「ふん！」と思つて、「どれもこれも馬鹿者揃ひだ！」とばかり、返事もしないで糸を縫つて居る。老母は倅が暖簾を疊んだ心得違ひを充

分に知つて居乍ら、たゞどうしても人が憎まれて仕様がなかつた。小僧どもゝ今までよりはくる／＼よく働くやうな氣がする。店が立派になつた、賑かになつた。といふ人の口が、尖つて自分の身を刺すやうに感じた。加賀屋の内儀に顔を合す度に、屈辱の復讐といったやうな心を持つた。「此婆め！」といふ内儀の胸と、「この猫かぶりが！」と思ふ老母の心とが、不意と顔を合せた時にぶつかつて、内儀さんの眼がひらりと閃く時がある。が瞬間に笑顔を頷して、朝なり晩なり時候の挨拶を柔くいふ。臺所は一緒に使つて居たので、老母は店の者の賄ひ方を睨んだり、そつとお汁鍋の蓋を取つて見たりなどした。

近在の得意が時々何氣なしにやつて來た。暖簾が替つて居るのに驚いて、譯を聞いて、多くはわざ／＼勝手まで寄つて聲をかけて行く。さういふ人達を、老母は我故郷人のやうになつかしがつて、お茶など煎れて飲ましてやつた。

菊の節句も近づいて、お神棚の幣帛も新らしくなり、其日は栗の赤飯に菊の花を隅に入れて赤い手をした小僧がお重を配つて歩く頃となつた。畑の中の家はやう／＼鉋を納めた。日を見て移轉がはじめられた。新主人は小僧一人だけを残して、あとの者を皆手傳はせた。二三の親戚、近所隣りからも、一人づゝの手傳ひがあつた。振舞ひの時の道具や、餘所

行きの衣類などは裏の倉に残して、日常の用具ばかり荷車で運んだ。落ちつかぬながら、大抵のものの位置がきまつて、夕陽に鳥の影が見える頃、家の前に石油の箱を並べて、それに張り板を渡して、手傳人を慰勞ねぎらひの酒が出た。程近い儀助が妹の嫁入り先から女衆が擲ながけで料理を運んだ。

家はまだ壁のにほひがして、木の香が充ちて居た。お米は翌あくる朝早く目を覺まして下駄を履いた。色づいた柿の梢を見上げて、幹の廻りをぐる／＼廻つて、袂たもとをかついで唱歌をうたつた。なにもかも嬉しかった。

それから三年経つたのである。垣の木槿もくげの花の瓣を短く摘んで、それを独樂どらくにして遊んだ廊下はくろずんで來た。見付けて來てはさま／＼なもの、を、無暗に置いたり植ゑたりした家の前は、いつか立派な庭になつて居た。年々夏蠶なつこを飼つて十溜ため近くの繭をとつて、其うちの幾分をお米のものにして織つて置いた。

時々鍵をさげて表町の倉にやつて來ては、井戸の前が何時も腐つて居るの、笥とひが破れて濕吹しづきがあたつて、それでは倉が堪らないのと、何か知ら小言を撒いて行つた老母は、其頃から持病の神經痛おもが重つて、其冬は炬燵を一つ持ち切りで唸つて居た。

婿が來てからは儀助は益々用のない體になつた。

毎日長火鉢の前に坐つて、膝を搖ゆすて居るか、さもなくば表町に出かけて、人の家の店に腰をかけて、ぼんやり表を眺めて居る。主人が對手あいてになつて居ようが居まいが、そんなことを氣にかけるやうな人ではなかつた。知つた家では、邪魔にもしなければ、歡迎もせず、手隙てひまだつたら話位はするし、洋があつたら遠慮なく放つて置く。

役場の火の見に天氣豫報の旗が、赤白青と變へられて、五月雨さみだれが續く頃になると、暫く町に儀助の姿が見えなくなる。私得ほまち仕事程の夏蠶が、馬鹿に出來ず手數を要するからである。近年畑を多く桑にしたので、其買手かひても日に二三人づゝはやつて來る。仲賣ひとの算盤そろばんの掛け引き、それが無事に手を拍うつたとしたところで、畑渡しのあとの切り直しやら、貫目渡しなら出向いて秤の目を檢査みなければならぬ。摘み子ちんぎんに賃銀を渡すやら何やら、其頃だけはお茶うけの紅梅焼もゆつくり喰べて居られないのである。でも良三郎はそんなことまで抜け目なく甘くうまやつた。仲買あひてひを對手に掛け引きもなか／＼強くやつた。

加賀屋の主人は、相變らず丸い目をしよぼつかせて、前掛まへがけをいつも落ちさうに緩く締めて居る。一度貸金よびだのことか何かで被告ていぎうどられて、地方の裁判所に召喚よびだされたことがあるが、二月ばかり過ぎて、勝訴になつて歸つて來た。内々或る高利貸と結託して、

鑛山に手を出したなどいふ噂もある。兎も角も店は立派に張つて行く。脊の割に長い羽織をひつかけて、よく小さな、細長い風呂敷包みを持つて、何處へか出かけて行つた。人使ひが上手とでもいふのだらう、内儀は店の者どもを、がみ／＼叱りつけるやうなことは決してなく、大抵は店に出て目になつて居た。此家のお茶受けには、いつも梅干に砂糖をかけたのが、盆に乗つてないことはなかつた。

お米は間もなく妊娠した。それが目にたつやうになつたので、荒土のまゝで置いた壁に漆喰を塗るやら、風呂場の普請を仕直すやら、大急ぎで用意をして、遠方の親戚にも招待状を發して、公然結婚の披露をした。お米は俄に老成たことをいふやうになつた。其代りまた一家を切り廻して役にも立つた。

男の子が生れた。激痛と疲労のこんぐらかつた夢中におろす時に、突然擧げた泣き聲を聞いて、お米は自分が強い／＼人間になつたやうな氣がした。屏風のかげから、息の切れる聲を出して力をつけて居た老母は、男の子と聞いて涙をこぼして喜んだ。そして一月と経たないうちに、病苦は辛かつたけれども、心を安じて永い眠りに就いた。

益々隱やかな一家となつた。

孫を抱えて、儀助は毎日のやうに表に出て來た。子供が降りるといへば何處にでもおろし、行くといへ

ば何處までも歩いて行つた。千哉と名付けて、それは知り合ひの神主に選んで貰つた名である。

* * * *

千哉は今年四つになつた。其名の貯金で買つた債券が、この春抽選で一等に當つて五十圓とれた。

畑の家の周圍には、今ではすっかり棟割り長屋が出來て、一日縄に通した襦袢がふら／＼して居る。

お米は縁側に解き物をして居て、役場からの督促吏が、人夫を連れて來て、或る家から、鍋や釜などを徵發して行くのを見たことがある。

良三郎は去年の暮から、遊んで居るよりはと或る人の世話で、役場の収入役を勤めて居る。今でも毎日辨當を持つて朝の八時に出かけてゆく。

お米はまた褪せた顔色をして肩で息を吐いて居る。此頃東京で生活をして居る昔の友達に、送つた手紙にいつまでこんなにして居ても仕方がないから、早く商賣なら商賣をするやうな工夫をしたいと思ふ。たゞかうして寢食いして居ては、いつまで過ぎても浮ぶ瀬はないし、第一世間から大した株でもあるやうに見られるのが辛い。などいふやうなことが細々と書いてあつた。「太郎は如何にして教育すべきや」などいふ本から得た知識で、子供の教育のこ

吉野屋からの小僧連は、今は大抵徴兵の検査が終

つて、引き續き、新らしい紬の羽織を着て、畑の家にも暇乞^{いしまじ}ひに來た。加賀屋では、今年は等級を一等のぼすべく、町會議員連から睨まれて居る。

儀助は相變らず、時々表に出かけて行つては、店先に腰を下して、昔ながらの銚豆煙管ですぱり／＼やつて居る。此頃は^{だいぶ}大分頭が白くなつた。

【謝辞】底本コピーをご提供下さいました菅野俊之様と石井由美子様にお礼申し上げます。

【入力者注】底本は総ルビですが、入力者の

判断で一部のみ残しました。

以下の修正を施しました。

100 上 8 吉屋^{よしの}野↓吉野^{よしの}屋

104 下 9 簾暖↓暖簾

107 ト 8 改行字下がないのはママ

底本 ..

「婦人くらぶ」明治四十二(1909)年第二卷第八號

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年七月四日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)